

【資料紹介】

松本喜三郎旧蔵の生人形『西国三十三所観音靈驗記』  
番付（明治十二、十四年）

―付、美術天真会『西国三十三所巡礼靈驗記』番付（明治三十四年）

細田 明宏

生人形とは、真に迫った等身大の人形を見世物興行にしたもので、松本喜三郎（一八二五―一九一）はその代表的な作者である。喜三郎が興行にかけた生人形『西国三十三所観音靈驗記』は西国霊場にまつわる靈驗譚を題材としたものであったが、多くの見物客を集めたことで知られている。

喜三郎の『観音靈驗記』は、明治四年（一八七二）二月から東京浅草奥山で、明治一二年（一八七九）二月からは大阪千日前で興行をおこなった。大阪で興行を開始するに当たり、いくつかの霊場では場面の差し替えがおこなわれるなどしている（細田明宏 二〇二〇 『近代芸能文化史における『壺坂靈驗記』ひつじ書房』。その後は内容に大きく手が加えられることはなかったようである。『観音靈驗記』は、

明治一二年十一月からは京都新京極道場に場所を移し、さらにその後は各地で興行をおこなっている。

これらの興行に際しては番付が発行されている。番付には一枚刷のものと冊子体のものがある。一枚刷番付は絵で、そして冊子体番付は文章と絵で靈驗譚を紹介しているが、どちらも興行の内容を窺い知ることができる貴重な資料だといえる。なお中前正志は、国立国会図書館所蔵の冊子体番付（明治一二年発行）を図版と翻刻とで紹介している（中前正志 二〇〇八「近代池坊いけばな縁起追考―生人形『西国三十三所観音靈驗記』六角堂条をめぐって」、『女子大國文』一四三、一一六〇頁、および、中前正志 二〇〇九「西国三十三所寺院縁起靈驗譚関係諸資料（三）」、『女子大國文』一四五、四七―九九頁）。ところで諸書で言及されているように、とりわけ明治一二年の大阪での興行は大変な人気を博した。番付も非常によく売れたために改版あるいは覆刻がおこなわれたようであり、さまざまな版が残されている（牧野和夫 二〇一八「生人形絵番付『西国順礼靈驗記』とその周辺―関連資料をめぐって」、『実践国文学』九三、二五―五二頁）。したがって生人形『観音靈驗記』の研究を進めるに当たっては、これらの版を比較することが有効であると考えられる。

そのため本稿では、松本喜三郎旧蔵品に含まれる冊子体番付のうち、明治一二年（一八七九）および一四年（一八八一）のものの影印を紹介したい。両者は体裁や内容がよく似ているものの異版である。これらの喜三郎旧蔵品はご遺族の元に伝わるものであり、図版の掲載をご許可くださった松本秀一氏に感謝するものである。

さて生人形『観音靈驗記』は、喜三郎の手を離れた後にも、数十年にわたって各地で興行がおこなわれた。本稿では、明治三四年（一九〇一）に美術天真会によって大阪でおこなわれた興行の際に発行さ



れた冊子体番付（架蔵）の影印をも併せて紹介したい。

一、喜三郎旧蔵の『観音靈驗記』番付（明治二年および一四年）

喜三郎旧蔵の冊子体番付は三種類あり、発行年はそれぞれ明治四年（一八七二）、明治二年（一八七九）、明治一四年（一八八一）である。このうち明治四年のものはすでに影印と翻刻を紹介したことがある（細田明宏 二〇二〇「松本喜三郎の生人形番付『西国順礼靈驗記』（明治四年）」、『帝京大学文学部紀要日本文化学』五一、一九―七八頁）。

本稿において紹介するのは、明治二年および一四年のものである。両者はどちらも、縦約一八cm・横約一二cmの袋綴じで、全二〇丁の単色刷りである。裏表紙は空白であるため、影印の掲載は省略した。また明治一二年のものには外表紙がつけられているが、これも空白であるためやはり掲載していない。

本文は両者とも、上半分に靈驗譚の文章と詠歌が記載されている。ただし、明治一二年のものは詠歌を庵点（へ）で示しているのに対し、明治一四年のものは靈驗譚の文章と詠歌の間に境界線が引かれているという違いがある。

両者の相違点としてもっとも顕著なのは奥付である。それぞれ翻刻は次の通りである。

（明治一二年）

明治十二年 四月十一日御届

同年 同月 出版

定価金三錢五厘

編輯 東京府下浅草区浅草北東仲町第八番地

出版人 大阪府下西区新町通壱丁目第十一番地

記者

画工

松本喜三郎

田中文治郎

内田正鳳

久保田桃水

（明治十四年）

明治十四年 七月 五日御届

同年 十一月 出版

定価金四錢

編輯／出版人 大阪府下西区新町通一丁目第十一番地

兌

田中文治郎  
松本喜三郎

二、美術大真会の冊子体番付（明治三十四年）

喜三郎の『観音靈驗記』は、明治二〇年頃に人手に渡ったとされる（大木透 一九六一『名匠松本喜三郎』昭文堂書店、一四七―八頁）。その後も、大阪をはじめとする各地で興行がおこなわれた（澤井浩

一 二〇〇四 「生人形と見世物興行―大阪と『西国三十三所観音靈驗記』」、「生人形と松本喜三郎」展  
実行委員会編『生人形と松本喜三郎』、一二五―一九頁。

そのうち本稿では、明治三五年（一九〇二）に大阪南地パノラマ館跡において美術天真会によっておこなわれた興行の際に発行されたと思われる架蔵の冊子体番付（明治三四年十二月三〇日発行、編輯兼発行者は井上仲蔵）を影印で紹介する。この興行に関しては、一枚刷の番付も発行（版元・井上仲蔵、日本芸術文化振興会蔵）され、また高橋好劇の「西国霊場活人形（中）」（『あのな』昭和二年十一月号）でも触れられている（[http://blog.livedoor.jp/misemono/archives/cat\\_500511\\_30.html](http://blog.livedoor.jp/misemono/archives/cat_500511_30.html)）。

この一本は縦約二三cm・横約一六cmの袋綴じで、表紙と本文に紙質の異なる洋紙が用いられており、表紙のみ多色刷りである。外題は『松本喜三郎翁作・西国三十三所順礼靈驗記・全』であり、表紙の絵画は「（長谷川）小信筆」とある。なお表紙（付01）と表紙見返し（付02）は糊付けされている。

一、喜三郎旧蔵の『観音霊験記』番付（明治二年および一四年）

表紙（明治一二）



表紙（明治一四）





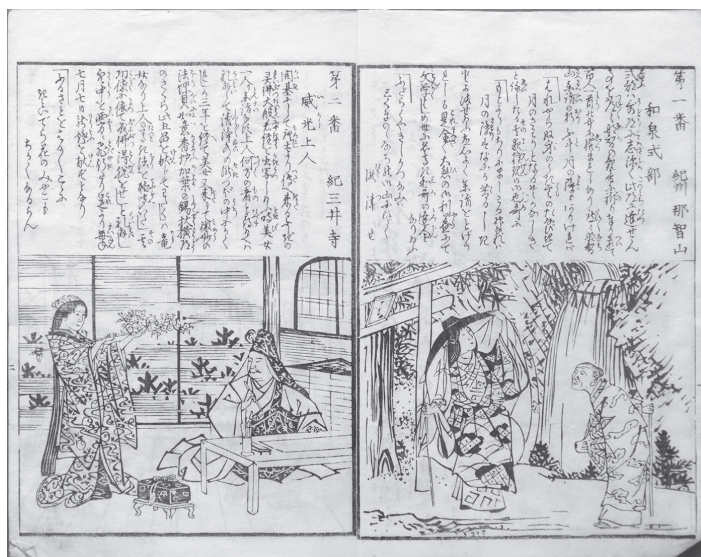
見返し——才（明治一二）



見返し—才（明治一四）



「ウー」才（明治二二）



「ウー」才（明治二四）







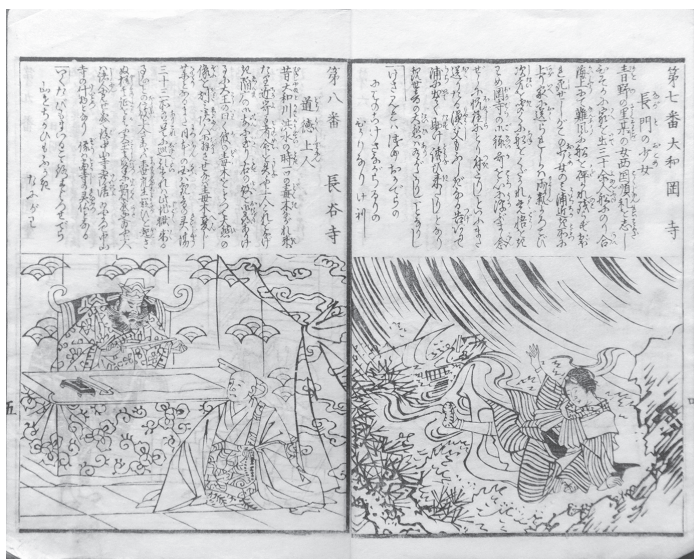
三ウー四才（明治一二）



三ウー四才（明治一四）







五ウー六才（明治二）



五ウー六才（明治二四）

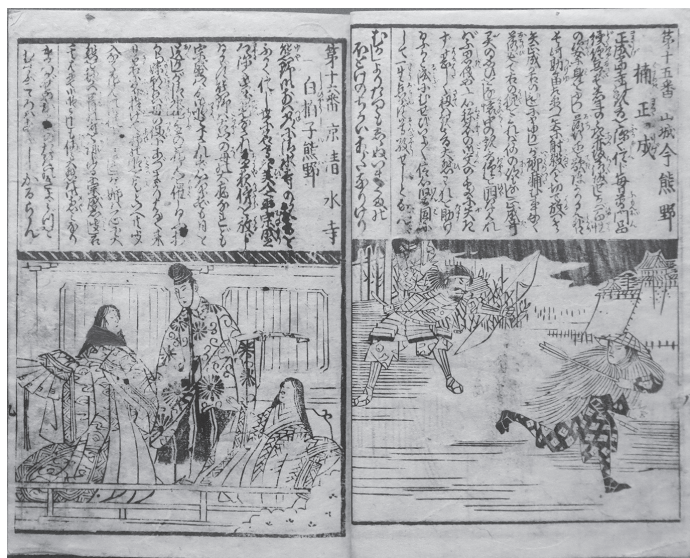












九ウー一〇才（明治一二）



九ウー一〇才（明治一四）



一〇ウー一オ（明治一二）



一〇ウー一オ（明治一四）

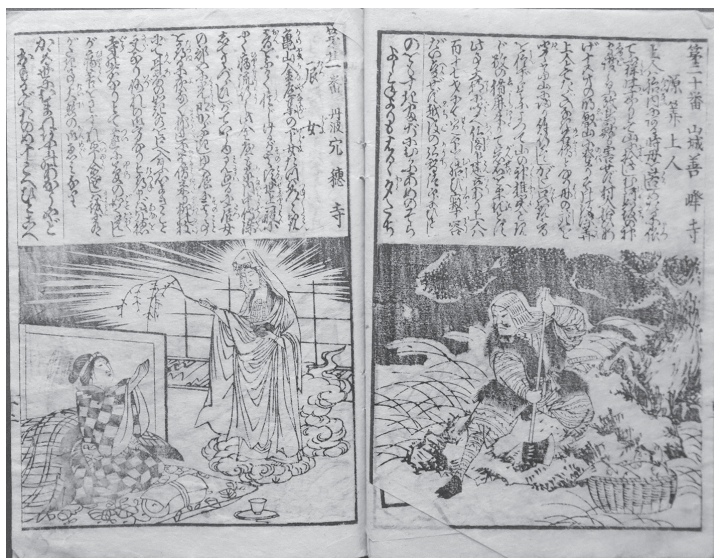




一  
一ウー  
一才  
(明治一)



二一ウー二才（明治一四）







二三ウー一四才（明治一二）



二三ウー一四才（明治一四）







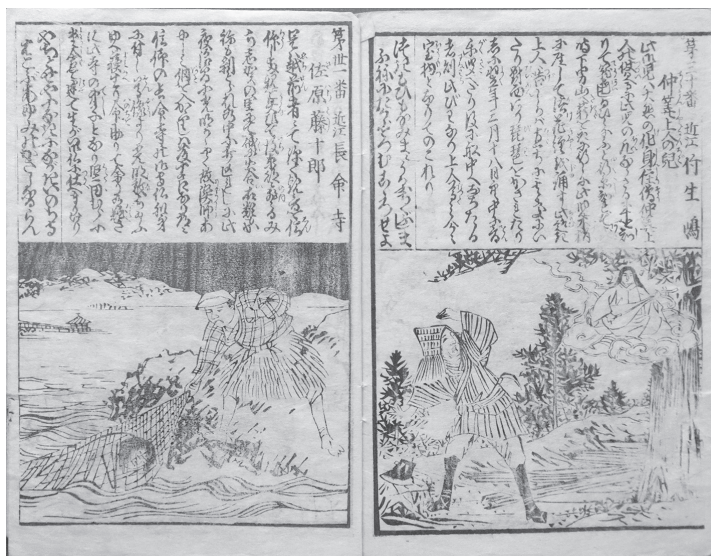




一六ウー一七才（明治一二）

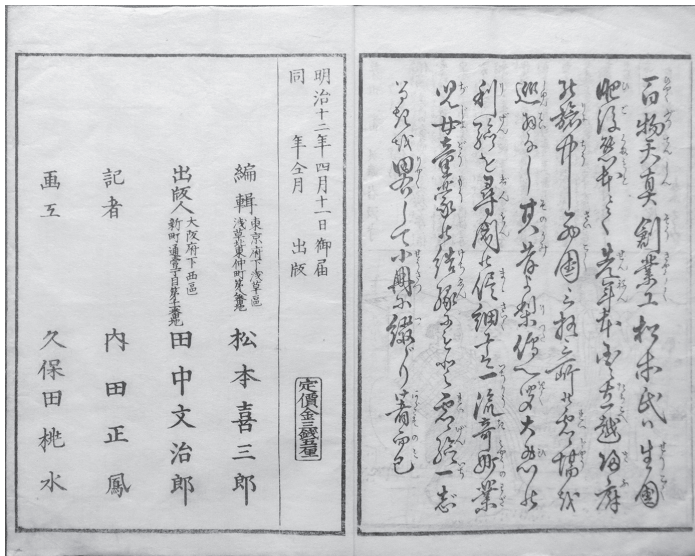


一六ウー一七才（明治一四）

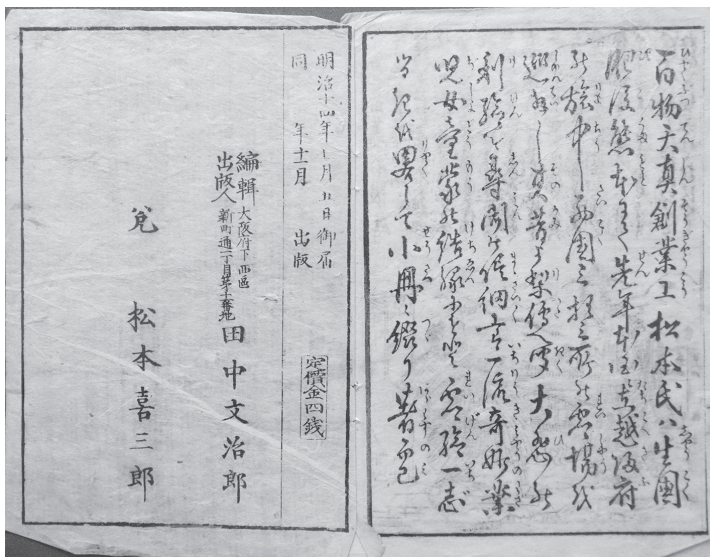




一八ウ―奥付（明治一二）



一八ウ―奥付（明治一四）





二、美術大真会の冊子体番付（明治三四年）





抑々此西國三十三所観世音緣起活人形といふは、維新の偉傑岩倉公をして、嗚呼百物天眞創業の名工と嘆せしめたる、斯道の泰斗故松本喜三郎翁が苦心慘澹數十年の歳月を経て漸く成功を告げし精代の美術にして、往年當地を始め全国各地の都會に於て古今未曾有の大好評を博したる事は、未だ江湖の記憶に残りて現時の兒童走卒に至るまで、三十三所の活人形といへば、その名譽を耳にする所なるが、以來幾十年間、所々に観音緣起の活人形と稱へて、世人の鑑賞に供するもありといへども、それは後進未熟の技にして到底名工の神品と比較すべきもならず、其上三十三所の幾部分のみを仕組みしに止まれば、いかでか世上の喝采を博する事を得んや、然るに此天眞活人形は其後各地の歡迎を受けて翁が出生地なる肥後の國熊本の地に入しく保存せられてありしに、名譽は遠く海外に響きて、美術を貴ぶ西洋人ども、莫大の黄金にかへて、かの國に持歸らんと切に望みたれども、名品の外域に逸せん事を惜み、深く寶庫に藏めしを、此度有志の勤めに應じて順禮一番札所より三十三番打留りまで、残る方なく取揃へ遙かにこの地へ歸し來り、廣大の地を相して諸般の設備を調へ、有名なる考古家に托し、衣冠什器は勿論、細微の景物に至るまで、古代の錦繡寶玉を集め、粹をぬき美を極めたれば、天來の神品に一層の光彩を放ち、錦上更に花を添へて諸子の瞻覽に供へまつらんとす、信仰の衆生、東門の人士はいはずもあれ、大方の諸賢子願くは、一度廻を狂げられて、此精巧幽妙の一大美術の眞趣を會得したまはん事を伏て希ふになん。

美術天眞會

# 西国三十三所順禮靈驗記

抑人王六十五代花山天皇は佛道に御歸依深く都を忍び出玉ひ山科の郷花山院にて御髪を剪ろさせ玉ひ能野權現へ參詣初遊靈夢により河内國石川寺なる佛眼上人を召連れ西国三十三所の靈場始那智山より終谷汲迄一々御詠歌の御製あらせられしより全國の道俗共に順禮の志願をおこせる輩今の世迄も廣大なる事偏に此君の御恩徳なりとぞ

うろよりもむろに入ぬる道なればこれぞ佛のみくになるべき



## 第一番 紀州 那智山

ふだらくやきしうつなみはみくまのい  
なちのかやまにひいくたきつせ

和泉式部

式部は歌道に志深く此道に達せん事を常々那智の觀音に祈り奉り遂に百人一首の中に撰まれしなり度々那智山へ參詣の折不月月のさはりありければ

はれやらむ身のうき雲のたなびきて月のさはりとなるかなしき

と詠じたる其夜權現の御返歌に

もどよりもちりにまじわる神なれば月のさはりはなにか苦るしき

とよませ玉ふ故こころよく參詣とどげられ大悲の御利益にて文學はじめ世に名高き和歌の達人となり玉ふ













第九番 大和 長谷寺



第九番 大和 長谷寺

**第八番 大和 長谷寺**

いくたびもまゐるころはつせでら  
やまもちかひもふかきたにかは

遺徳上人  
昔大和川洪水の時一ツの毒木ながれ來たり近寄る者やまひを受ける上人靈  
木なるをとり觀音の像を作り大がらんを建立し法華一萬部を寫し餘慶王  
の教により萬僧をまつめ供養し玉ひ閻王の御前に参り御禮申しければ大  
王の仰に日本の國は觀音の靈場三十三所あり是に巡禮すれば此地獄に來  
る事なしとの仰故上人さわらば末世に衆生疑ひを起さぬやう其證を  
乞ふ大王自筆血判して與へ玉ふ上人は諸人に見せて致玉ふ後中山寺に隱  
居し玉ふ依て中山寺の什物となり像は當寺の靈佛即ち本尊なり

**第九番 大和 長谷寺**

はるの日はなんねんごうにやうやう  
みかさのやまにはるいうすやう

春日明神  
此寺は藤原冬嗣公子孫の繁昌を弘法大師に御尋ありければ不空絹索の像  
を造す此御堂御建立の時春日明神夫人に交りて土木を運び玉ひ日雇錢を  
うけ玉はす成就の後一首の歌をいひ玉ふ  
普陀落の南のさしにだう建ていさすさかねんきたのふじなみ  
と遊され此御寺と藤原の家々永く守るべしと仰られ消失せ玉ふ依て明神  
なる事をしり玉ひ傍らに社結び永世守護神と崇り玉ふより







第十三番  
石山寺



第十二番  
岩間寺

**第十三番** 近江 石山寺

のちのよとねがふこゝろはかるくども  
はどけのちかひおもさしいやま

京本願寺七世の上人石山寺へ参詣有し時其邊より召抱られし女寵愛あり若君誕生ある布袋丸といふ御供公常に一宗再興の旨御申合ありて六才の時鹿の子の袴袖と着せ参らせ御姿を繪に寫し一首の歌を残し石山寺に歸らせ玉ふ「戀しくば尋ね來て見よ唐櫛の石たつ山は母のふるさと」と詠じ歸らせ玉ふ石山寺は是迄本尊御留主七年目に御歸なされたり此布袋丸は八代目通如上人是なり中興上人と共に奉ること世人の知るところなり

**第十二番** 近江 岩間寺

みなかみはいしくなるらんいはまでら  
きしうつなみかまつかせのかど

桃青は天下に名を得し俳家の祖なり翁常に岩間寺の観音を深く信じ何卒我が道に達せんと祈誓し此所に續く國分山に閑居し三年の間住即ち此庵を幻住庵と號して一夏九十日の間に法華經の下八品を石一ッに一字づゝ書き此里の小供に小石をひろはせ持來る者へは菓子と與へてすみやかに成就して大悲の靈驗を蒙り名を一天にかゝりかせしも偏に御佛の御利益なり此庵に幻住庵の記を書れたり其奥に  
ます頼む椎の木あり夏木立



<p><b>第十四番</b> 近江 三井寺</p> <p>いでいるやなみまのつきを三井寺の かねのひいきにあくるみづうみ</p> <p>大津の町下女杉</p> <p>杉は常に觀音を深く信じ毎月風雨を厭はず三井寺に参詣す傍壁は皆々笑ふといへ共少しも心を定めず其所世間におこりの網流行しが一人も逃るゝ者なけどもこの女杉りは何の障りもなく或時二階に横上げたる薪を取らんとはしを掛けて上りしに薪くづれ落ち梯子をれて眞滿縁に石臼の上へ落て上に夥多の薪落重り骨身も碎ける有様なるに何のけがもなかりしゆる餘り不思議と身内をみるに如意輪觀音の小髻懷中より出玉ふ家内一同皆は大悲の御助けも佛力を皆人奪ひける</p> <p><b>第十五番</b> 山城 今熊野</p> <p>むかしよりたつともしらぬいまの はどけのちかひあらたなりけり</p> <p>楠正成</p> <p>正成常寺の觀音を深く信じ毎日普門品讀經意たらす若年のとき赤坂落城せしかば百姓の姿に身をやつし落行く所を敵陣より見替め長崎勘解由左衛門一矢に射殺さんと切て放つ其矢正成の右のひじに當りしが胸か痛む事なく落延て右の腕をみれば何の跡もなし正成奇異の思をなし懷中の觀音經を開き見れば不思議や一心稱名の御文の處に矢傷甚しくさては觀音大悲の力を助け玉かと涙にひせばいよく信心堅固にして一生怠らず敬敬せしとなん</p>	<p>八</p>



第十六番 京 清水寺

まつかせやかどはのたきのきよみづを  
ひすぶこゝろはすいしかるらん

白拍子熊野

熊野御前くまのごぜんは常に清水寺しみずでらの観音くわんおんとふかく信じ世に名高き美人なり平宗盛へいそうせい御前ごぜん深く御寵愛ごちゆうあいなされ晝夜傍しやばうを放し玉はす熊野は古郷ふるきやうの母の大病おほいなれども宗盛そうせいより御暇ごいふを下されす心ならずも日を送りしが清水地王しみずぢおうの花見はなみを催し賜ふ折たまはから妹朝親母あそちかみの使にあつまよりはるく來り君に文を捧げ姉の暇を乞こといへ共聞ともきこ入いれなく花見はなみの御供ごけに連れられしが姉は一心に大悲だいひをねがひ一首の歌を詠よめじけるに宗盛そうせい御聞ごきこ召其場にて御暇ごいふ被下おろしも偏に大悲だいひの御患ごわづらひみなり

第十七番 京 六波羅密寺

おもくともいつつのつかはよもあらし  
るくはらだうにやいるみなれば

空也上人

天曆九年てんりきくわんの春洛中大疫しやうちやうだい病流行して諸人の死難しにがた街にみち市中の悲かなみいはん方なく空也上人くわんやうじん深く歎なげきて自ら十一面の像ざうを刻きみて車にのせ市中を曳ひわたり信心を進め玉ひしに一度曳ひし町はどみに癒なをけり此本尊このほんぞん即ち東山六波羅密寺とうざんろくはらみつでらこれなり又御茶湯ごちやうをいたゞく者は忽ち疲病治ちやうしたり此事帝村上天このことみけのてん皇の報聞ほうもんに達し殊に御信ごしん仰ありよつて吉例きちれいとして毎歲元朝まいさいげんてうに佛供ぶつぐの御茶湯ごちやうを服し給ふにより下々に至るまで王服おうふくと稱し祝し用もちゆる例れいとなれり



 <p>第十八番 京六角堂</p>	 <p>第十九番 山内草堂</p>
<p>第十八番 京六角堂</p> <p>池坊</p> <p>當寺の本尊は上宮太子七世の御守り佛靈木の太杉一本を以て六角の堂を建玉ふ一人の臣を堂守として附屬し賜ふ即ち池の坊是なり本尊兄と現じ玉ひ花活法の法を教へ玉ふ是日本立萃活法の始り観音大悲の御傳授にて元祖池の坊より千場未生萃堂連州郡と流義せらるゝに別れ其大源は六角堂池の坊と今の世に名もたかしこれ大悲の靈驗尊き事共なり</p>	<p>第十九番 京草堂</p> <p>東山大工某</p> <p>常に此觀音を信し朝夕に參詣いたしけるが丹波佐山に有知の大綱申來りし故急に支度をなしたるに其妻密夫ありて饅飯に毒を入れて殺さんと巧みしを大工夢にも知らず丹波路に來りしに山賊に出わひ残らずはざとられ裸にて姉のかたへ行ろの始末を語れば甥に角力取ありてその品々をどり返さんと連立行みるに賊は饅飯を喰て死居たりし故殘らずどり戻し誠に菩薩の御誓願を尋みはく信心せり</p>





第二十番

山城 善峰寺

のともすぎ やまぢにむかふあめのら  
よしみねよりもはるゝもふたち

源上人

上人は胎内にある時母を苦しめたるに依て不祥の子なりとて山に捨てしむ阿知飯の神守護し玉ふ故鳥獸も害せず村人拾ひあげ十五歳の時叡山に登りその後源算上人とてたぐひなき名僧となり母の死を聞き當山に歸り餘行盡しかたし只觀音を信ず是によつて山の神權夫と現じ數多の猪鹿來りて岩石を平地とす此の事天朝に聞へ佛閣御建立あり上人は百十七才にて定印を結ひ寂す容たい變せず越後の弘智法印にひとし

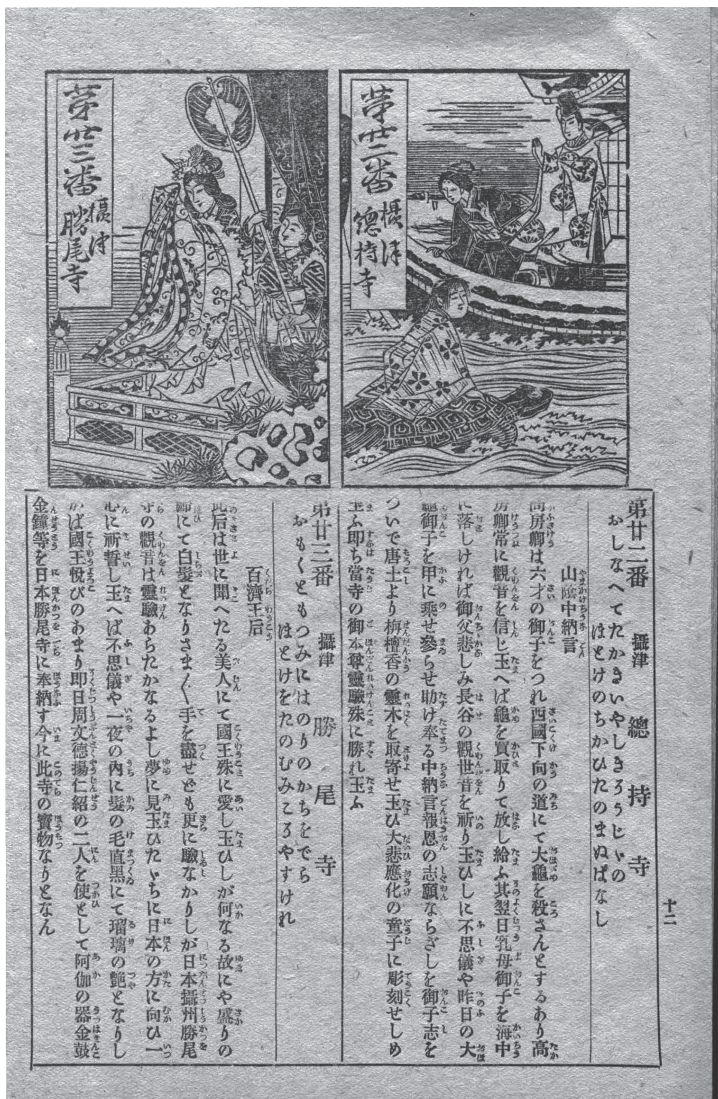
第廿一番

丹波 穴穂寺

かゝるよにひまればあふみのあなうや  
おもはでたのめ十こへひとこへ

辰女

龜山金屋某の下女たつは常々觀音をふかく信じけるが其頃世上一般にやく病流行し此金屋も家内中傳染してわづらひしがていしも見廻るに辰女の部屋に光明かいやきしもの辰に其事を尋ねるに夜な／＼枕邊に賢僧來り柳の枝にて甘露の如き水を口へ入玉ふ心よきこと更なり何れの御方なりと尋ね申せば穴穂寺の者なりとて遂に夢の如く覺しが病苦をわすれ平癒せしは寔に有がたき事大悲の御恵みなり















<p>廿世一番 近江 竹生島</p>	<p>第三十番 近江 竹生島</p>
<p>是は越前者にて深く観音を信仰し両親を失ひて後々京都に登るうち志賀の里にて賊に出合ひ衣類もかねも剣どられ水中に打込れしに此夜波間に光明かいやくゆる漁師あやしみ網を入かくりしは藤十郎なり常に信仰の長命寺の御守佛肌身に付けし尊像より光明放ち賜ふゆる衆生り命助かりて餘り有難さに此てらの寺子となり堅田むらに堂舎を建て生がい御佛に仕へ奉りける</p>	<p>第三十番 近江 竹生島 つきもひもなみせにうかぶちくふしまふねにたからをつむこるせよ 仲算上人の兄 此御兄は大悲の化身住僧仲算上人の便ひ給へるに此兄の凡ならざる事を知りて寵愛し給ひしにふと行衛知れず或時下男山へ薪を取りに行しに此兄木末に座して法華經を誦す此趣き上人へ告しかば直ちに其處にいたり對面あり経巻をかされたりしに翌年三月十八日空中に音樂聞へたり後に船中へおちたる者則ち此びわなり上人尊み今に寶物となりてのこれり</p> <p>第三十一番 近江 長命寺 やちとせややなぎにながさいのちてらはこふあもみのかざしなるらん 佐原藤十郎 是は越前者にて深く観音を信仰し両親を失ひて後々京都に登るうち志賀の里にて賊に出合ひ衣類もかねも剣どられ水中に打込れしに此夜波間に光明かいやくゆる漁師あやしみ網を入かくりしは藤十郎なり常に信仰の長命寺の御守佛肌身に付けし尊像より光明放ち賜ふゆる衆生り命助かりて餘り有難さに此てらの寺子となり堅田むらに堂舎を建て生がい御佛に仕へ奉りける</p>





